

# モンゴル仏教における無量壽佛灌頂の研究

嘉木揚 凱 朝

キーワード

モンゴル仏教、無量壽佛灌頂 (Ayusi Borqan nu abhiṣeka)、瑞應寺

## はじめに

本研究は、主に中国遼寧省阜新蒙古族自治县佛寺鎮にある瑞應寺（モンゴル語ガイカムシガジョキラゴルツチスめ Gaiqamsig jokiraguluci süm-e、チベット語 dGaḥ ldan dar rgyas grub gliṅ、通称：佛寺）の僧侶が、実際に一般のモンゴル仏教徒の自宅へ出向いて執り行なっている無量壽佛灌頂 (Ayusi Borqan nu abhiṣeka) の実例を調査研究したものである。

一般のモンゴル人は、どうしてこの無量壽佛灌頂の儀式を執り行なうのか。何処で、どのように執り行なうのか。これらを具体的に明らかにして行きたいと考えている。儀式を行なう僧侶は何人なのか、どのような経典を用いているのか、なぜ寺院ではなく、自宅で執り行なっているのか、また、その動機などについて明らかにしたいと考えている。

まず、瑞應寺の歴史を簡単に紹介する。

チベットは中国で「西藏」と呼ばれるのに対して、瑞應寺は、「東蔵」と呼ばれる、内モンゴル地域で最大の寺院である。その寺院は清朝の康熙八年(1669年)に建立が始められた。瑞應寺に関しては、昔から次のような口承が存在する。

有名な喇嘛三千六、無名喇嘛如牛毛。

有名な僧侶だけで、3,600人がある。名も知られない僧侶は、牛の毛のように無数であつて数えられない、というのである。

モンゴル語で記述される寺誌『瑞應寺』<sup>①</sup>によれば、清朝後半期、蒙古鎮（現在の阜新蒙古族自治县）には、国に登録された仏教寺院 (ulus dü neretei süm-e) と、県に登録された仏教寺院 (qosigun süm-e) と、村に登録された仏教寺院 (ai-l un süm-e) とで、約300寺院あつたという。僧侶の数は2万人にのぼり、瑞應寺だけで僧侶の数は、3千人にのぼると記している。康熙四十二年（1703年）康熙皇帝は、チベット語・モンゴル語・中国語・満州語で表記した「瑞應寺」という寺名の勅額を贈った。

瑞應寺第一世の活仏チャガンディヤンチホトクト・サンダンサンボ (Cagan diyanci Qutugtu Sandan bzanbo) に、

Jegün gajar un monggol un Ebugen Borqan.

東土におけるモンゴルの長老仏

という称号を贈った。

瑞應寺は、180年を費して完成されたモンゴルの仏教大寺院である。仏像は一万体以上が数えられた。内モンゴル東部地域の宗教、医学、文化などの中心地であった。しかし、1949年10月の中国解放後、特に文化大革命(1966～1976)などの影響やその打撃から、宗教活動はすべて禁止され、建物で残ったのは「大雄宝殿」だけであった。大雄宝殿が残ることができたのは、食糧機関の倉庫として使用されたからである。文化大革命の時、何千人もの料理を同時に調理することができる銅製の鍋を鑄つぶして、阜新市の中心地に毛沢東の像を造った。今日も残っている。活仏居住の寺院は佛寺鎮の役所に転用され、西側の建物は佛寺蒙古中学校に転用され、東側の建物は郵便局に転用された。哲学修学の学園寺は佛寺小学校に転用され、モンゴル仏教の護法神である関羽廟は佛寺病院に転用され、医学修学の寺院は電力会社に転用された。このように瑞應寺は役所や他の機関に転用された。

## 《発願者の無量壽佛灌頂の申請》

2002年9月10日、阜新蒙古族自治县佛寺鎮ホイトウホロガ村 (goitugoroga、北河欄) のナムレイ老人の自宅で、無量壽佛灌頂の儀式が執り行なわれた。無量壽佛灌頂を受けたのは、ナムレイ老人、73歳のモンゴル人であった。発願者は、ナムレイ老人の甥の呉宝龍氏であった。

モンゴルでは、古くから阿弥陀仏(無量壽仏)が信仰されてきた。モンゴル人が阿弥陀仏を信仰し供養するのは、モンゴル人にとって阿弥陀仏は、人間の寿命を延ばすことができる仏であると強く信じられているからである。昔から毎年、僧侶を自宅に招き、父母の延命長寿を祈願して、阿弥陀仏を讃嘆する經典による法要を依頼する習慣が、今日でも広く行われている<sup>2)</sup>。

今回は、瑞應寺の僧侶が、無量壽佛灌頂の儀式を執り行なった。今回の無量壽佛灌頂の儀式を行なうことになったのは、ナムレイ老人が、2002年で丁度73歳の日本の干支でいう本暦の年にあつたためであった。本暦の年には、自分の父母や年上の親戚に長く生きて欲しいと願って、寺院の僧侶を自宅に招いて、無量壽佛灌頂の儀式を執り行うのが普通である。ナムレイ老人は、呉宝龍氏の母の兄である。呉宝龍氏は、村人に親孝行であると誉められている。呉宝龍氏は、自分の父母だけではなく、日本の言葉でいえば、積極的に

村の老人たちに対するボランティア活動を続けている。

無量壽佛灌頂の儀式を行なうにあたって、儀式の対象となる老人本人の許可を得なければならない。この無量壽佛灌頂の儀式は、老人のために執り行う儀式であり、若い人向けに執り行なわれることはない。また、寺院の住職あるいは総務長の許可を得なければならない。僧侶に布施する経費や、村の人々に馳走するための費用も必要となる。日本円で5万円程度あれば、十分儀式を行なうことができる。このような儀式は、毎年行なっているわけではないから、普通の家庭でもできる。発願者の呉宝龍氏が寺院の許可を得た後は、いろいろな準備を整えなければならない。儀式は寺院ではなく、民間の自宅に4名以上の僧侶を招いて、無量壽佛灌頂の儀式は執り行なわれる。

ナムレイ老人の自宅は、寺院から1キロ離れた村にある。僧侶は、呉宝龍氏が用意した馬車で迎えられた。迎えられた僧侶は、80歳のサグゲ ラジャブ長老を導師とし、もう1人の80歳の長老と、3名の若僧とで、合計5人の僧侶で無量壽佛灌頂の儀式が執り行なわれた。ナムレイ老人の自宅に村人がたくさん集まってきた。この儀式に参加し、隨喜灌頂を受けることができる人はすべて老人であり、一般的に若い人は参加しない。5人の僧侶がナムレイ老人宅に到着し、簡単なお茶の招待を受けてから儀式が始まった。導師が中央に坐り、左右に4人の僧侶が坐った。供養される物には、灯明・線香・ピラン (gtor ma 酥油花) に加えて、果物、菓子などを含めた供物があった。用いる什器には、金剛杵 (rdorje)・金剛鈴 (dril bu)・ダマル・神鼓 (mchod rna)・法螺 (duñ chos)・曼荼羅・宝瓶・五方仏宝冠などがあった。ナムレイ老人と妻、その他の参加者は、5人の僧侶の方に向けて坐った。

灌頂に用いた聖典『灌頂文』は tShe mchog ḥchi med ḥdod ḥjo dbaṅ gi rgyal po gsol ḥdebs smon śis dañ bcas pa shes bya pa bshugs so (勝壽であり無死であり衆生を満足させる灌頂の王と敬請と祈願と吉祥と名付ける [文]) であった<sup>(3)</sup>。

モンゴル仏教では、ほとんどの聖典は、文殊菩薩に対する「na mo gu ru mañjugho kāya」(上師文殊菩薩に帰依し奉る) という「偈文」で始まる。それから本文に入る [1頁]。

この『灌頂文』は、チベット仏教ゲルク派の活仏パンチェン・ラマ四世であるロサンチョジゲルツェン (bLo bzañ chos kyi rgyal mtshan 羅桑却吉堅讚 1567-1662) が、作成したものとされる<sup>(4)</sup>。

## 《無量壽佛灌頂儀式の順序》

無量壽佛灌頂の儀式の順序は、以下の順序で執り行なわれる。

- (1) 敬請誦 (gsol ḥdebs)

- (2) 我生 (bdag bskyed、私が仏となる)
- (3) 成就宝瓶 (bum pa grub、瓶も仏となる)
- (4) 対生 (mdun bskyed、仏が現前する)
- (5) 灌頂 (dbañ bskul pa = abhiṣeka)
- (6) 吉祥誦 (bkra śis rtags cad)

以下の文章の [ ] 内の頁数は、『灌頂文』の頁を示す。( ) 内の漢訳の偈は、筆者がチベット語から翻訳したものである。

### (1) 敬請誦 (gsol ḥdebs)

この儀式は密教によるものである。まず敬請するのは、金剛持仏文殊菩薩から始まりツォンカパに至る祖師と無量壽仏など九尊を数える。

敬請は、私は、菩提を得るまで仏・法・僧に帰依する。灌頂の対象となるナムレイ老人の私と、一切の他の衆生との幸せを成就するために、まず私が慈・悲・喜・捨の菩提心を生じなければならない。十方清浄の浄土にまします仏・菩薩よ、聞き届けて下さい。私が慈・悲・喜・捨の菩提心を円満するために、いま菩提心を起さなければならない。

このように三度敬請誦を読誦して、三帰依と菩提心を発こす [7 頁]。

### (2) 我生 (bdag bskyed、私が仏となる)

敬請に続いて、次のように「我生」が始まる。

私(行者)は、この瞬間の刹那 (skar cig) に世尊無量壽仏 (bcom ldan ḥdas tShe dpag med) となる。生き生きした「心月」という意味をもつ胸にある赤い  $\text{ཨྱ}$  'hriḥ' という字の光から、そして極楽浄土 (bde pa can) から、上師と世尊無量壽仏との九尊がましますマンダラ (壇城)、すなわち修行道場の前の虚空に、諸仏・諸菩薩が現われた。 $\text{ཨྱ}$  'hriḥ' という字の光が私の心底に溶け込み私は仏となる。

誰の恩によって、大いなる樂にいるのか。誰が刹那のこの瞬間に現われているのか。私にとって上師は宝のようであり、金剛尊の足許に頂礼し奉る。

ḥJi rten ḥdren paḥi gtso bo dshe dpag me// dus min ḥchi ba ma lus ḥjoms paḥi dpal// mgon med sdug bsñal gyur pa rñams kyi skyabs// sañs rgas tshe dpag med la phyag ḥdshal lo [8 頁] //

(世間引導無量尊、非時死因盡消除;

無依苦惱之衆生、頂禮護祐無量壽。)

世間を導く主尊無量壽仏は、非業の死因をすべて消滅する。帰依するよるべがなくて苦しむ人々の、依りどころである無量壽仏に礼拝し奉る。

このように礼拝してから、無量壽仏と諸菩薩に真言で八供養(飲料・沐浴水・花・薫香・灯・塗香・食物・音楽)をする。八供養の真言は、梵語で唱え、一切の如来と無量壽仏と

その眷属とに、水など八供養を供養する。

続いて、慈・悲・喜・捨である「四無量心」の偈文を読誦し、敬請された諸仏・諸菩薩は、それぞれの浄土である資糧田（ソクシン・tshogs shii）に送り帰えす [8 頁下]。

続いて私は、世尊その方の寿命と智慧とは無量であって、九仏のマンダラを一切円満するのは、中央に毘盧遮那無量壽仏 (rNam snañ tshe dpag med)、東に金剛無量壽仏 (rDo rje tshe dpag med)、南に宝無量壽仏 (Rin chen tshe dpag med)、西に蓮華無量壽仏 (Padma tshe dpag med)、北に業無量壽仏 (Las tshe dpag med)、東北に遍照無量壽仏 (Kun gzigs tshe dpag med)、東南に功德無量壽仏、(Yon tan tshe dpag med)、西南に智慧無量壽仏 (Ye śes tshe dpag med)、西北に不動無量壽仏 (Mi gyo tshe dpag med) がそれぞれましまして、これらの諸尊の身の色は、すべて珊瑚でできた須彌山が千の太陽に照らされているような、赤い光を放っている。九仏は微笑の姿を示し、一面二手で、等持印に坐し、その手の上に長壽の甘露に満ちた宝瓶がある。宝瓶は、求めるものすべてを如意樹のように与える。(中略) 九仏は、いろいろな莊嚴で飾られた円満の受用身である。願望を満たす力を具えた天衣を羽織り、絹の美しい衣服をまとい、金剛跏趺坐にある。九仏すべての頭頂に白色の𑖀‘om’ の字、咽喉に赤色の𑖀‘ā’ の字、胸の月座に赤色の𑖀‘hriḥ’ の字を青色の𑖀‘huḥm’ 字で飾っている。‘om・ā・huḥm’ の三字から光を放っている。極楽世界などや修行者のマンダラなどが現われ、現われた極楽世界と修行者との眼の前に、上師（本尊）、諸仏、諸菩薩、世尊無量壽仏が、‘om・ā・huḥm’ の三字から姿を現わす [13 頁下]。

Ma lus sems ca kun gyi mgon gyur ciñ// bdud sde dpuñ bcas mi bzad ḥjoms mdsad lha// dños rams ma lus ji bshin mkhyen gyur paḥi// bcom ldan ḥkhor bcas gnas ḥdir gśegs su gsol [19 頁] //

(無余有情依怙主、無盡魔軍能摧壞；

一切真實悉正知、佛興眷属乞降臨。)

全ての有情は拠るべき主を求む、いかなる魔軍をも打ち破るものにして。

一切の眞実をことごとく正知するもの、仏とその眷属が降臨されんことを請い求む。

この一偈によって諸仏・諸菩薩を請来し、供養するのである。

無量壽仏と修行者と不二になり、再び心底の‘hriḥ’ の字から光を放ち、宝冠五仏と眷属を迎請する。こうして一切の如来から灌頂を受けることを願うのである。

Ji ltar bltams pa tsan gyis ni// lha rnam kis ni khus gsol ltar//

lha yi chu ni dag pa yis// de bshin bcom ldan sku khruḥ gsol [21 頁] //

(雲何如来降誕時、一切天衆献沐浴；

今以清淨妙天水、我亦如是作灌沐。)

如来が降生されし時、一切の天の衆生は沐浴を献ず

我もいま清らかな天の水をもって、如来に沐浴を献じることかくのごとし

この一偈文によって請来した諸仏・諸菩薩に沐浴を献ずることによって、灌頂を受ける修行者が灌頂を受けることになる。全身は、沐浴に満ち溢れ、すべての汚れを浄める。なお、沐浴の聖なる水は、無量光仏の姿では宝冠の飾りであると考えられている [14 頁]。

### (3) 成就宝瓶 (bum pa grub、瓶も仏となる)

我生に続いて、次のように成就宝瓶が始まる。

宝瓶は空性になる。空性になった宝瓶から ‘om’ の字の大きな宝器の中に、‘om’ の字の光に溶けて出る飲料・沐浴水・花・薫香・灯・塗香・食物・音楽の八供養は、生き生きとして透明で無碍であり、虚空のようである。

このように、梵語で八供養して加持し、続いて長壽仏の真言を読誦する。それから仏の智慧を深く広く極める「深明不二 (zab gsal gn̄is su med pa)」である本尊と不二となる修行をすべきであるとされる。修行の間に罪があったとしても、罪がある衆生が心底の心月にある ‘hr̄iḥ’ の字の真言に集まって、‘hr̄iḥ’ の字が輝き、清浄でない有情を浄め、衆生を利益するために、行者の身・語・意を加持する。

続いて不死の真言を読誦する [15 頁下]。

この真言を1万回唱えるか、あるいは10万回唱える必要があるとされる。

行者の意根に五明無量壽仏 (Rigs l̄na dshe dpag med) がましまし、頭頂に智慧無量壽仏がまします。私の心底の光から、無量壽仏の眷属である仏、菩薩、空行母、護法神や、天と人との諸持明者の寿命と智慧、加持寿命の甘露光などが現前に現われる。これらの一切が頭頂の智慧無量壽仏に溶け、長壽の甘露に溶け、頭頂から意根の五明無量壽仏に溶け、その五明無量壽仏は再び不死長壽の甘露に溶け、灌頂者の頭頂から足底まで長壽の甘露で満ち溢れる。

こうして、不死の長壽を成就 (dn̄os grub) し、身・口・意の三門は、無量壽仏になるとされる [17 頁]。

法要を盛大に執り行う場合は、九宝瓶と事業宝瓶を用いる。小規模な場合は、長壽宝瓶と事業宝瓶とを用いる。その他、用いる什器として、白布・法螺貝・金剛杵 (rdo rje)・金剛鈴 (dril bu) などを準備し、銅鏡・琵琶・法螺貝の中の香水・果物・白綾の五妙欲 (ḥdod yon l̄na) をもって加持する。銅鏡・琵琶・海螺の中の香水・果物・白綾は、色・声・香・味・触を意味する。

### (4) 対生 (mdun bskyed、仏が現前する)

成就宝瓶に続いて、次のように「対生」が始まる。

儀式を行なっている僧侶が宝瓶を持ち、Orn na mo bhagavate a pa ri mi ta... で始まる阿弥陀仏の真言で対生のマンダラを成就する [24 頁]。

モンゴル仏教、特に瑞應寺の『灌頂文』に記載している九尊無量壽仏のそれぞれの働きは以下の通りである。

- ① Chos kyi h̄khor lo rga chen bskor// sems can sdug bsñal ma lus pa//  
skad cig ñid la sel mdad pa// sañs rgyas tshe dpag med phyag htshal [30 頁] //  
(轉動廣大法輪故、有情一切之煩惱；  
刹那之間悉消除、頂禮世尊無量壽。)  
法輪を廣大に転じて、有情のすべての苦しみを、  
刹那に消滅することができる、無量壽仏に礼拝し奉る。
- ② rDo rje sems dpañ las byuñ shiñ// ñes pañi dri ma kun h̄jomas pa//  
rdo rjeñi lus can rdo rje can// rdo rje tshe dpag med phyag htshal//  
(從金剛勇識而生、罪汚一切能摧壞；  
金剛身興金剛者、頂禮金剛無量壽。)  
金剛勇識から生まれて、罪の汚れをすべて打ち破る。  
金剛の身体である金剛者、金剛無量壽仏に礼拝し奉る。
- ③ Sam pañi dños kun skad cig gis// rañ h̄dod bshin du tshim mdsad  
dpal//mchog gis bdag po chen po ste// rin chen tshe med phyag htshal//  
(一切須求之意樂、各己刹那成満足；  
殊勝大主之面前、頂禮大宝無量壽。)  
心に思うすべてを刹那に、その人の望み通りに満足することができる。大勝主である  
面前の、大宝無量壽仏に礼拝し奉る。
- ④ i ltar ñon moñs dri ma yis// kun nas gos par mi h̄gyur shiñ//  
thugs rjes chags tshul ston par mdsad// padma tshe dpag med phyag htshal//  
(煩惱汚垢盡如何、一切傳染豈能成；  
講說形成之狀況、頂禮蓮華無量壽。)  
いかなる煩惱に汚れていても、どこからも侵入することができない。  
慈悲のあり様を講説している導師、蓮華無量壽仏に礼拝し奉る。
- ⑤ bsams kun h̄phel byed dpag bsam shiñ// las kyi tshe dpag med phyag htshal//  
h̄Dod pañi las mams ma lus pa// skad cig ñid la rdsogs mdsad dpal//  
(所求事業盡無余、刹那之間圓成尊；  
意樂增加如意樹、頂禮事業無量壽。)  
求めている事業などすべてを、刹那に円満できる吉祥者、  
求めているすべてを如意宝のように増加できる、事業無量壽仏に礼拝し奉る。

- ⑥ Ñes pa kun las nmam gral nas// sna tshogs yon tan nmams kyis brgyan//  
h̄khor paḥi skyabs mdsad dpaḥ bo ste// kun gzigs tshe dpag med phyag ḥtshal//  
(一切罪惡盡解脱、各種功德作莊嚴；  
輪廻能護之英雄、頂禮遍觀無量壽。)  
一切の罪から解脱し、いろいろな功德が飾る。  
輪廻してもよく護られた英雄、遍觀無量壽仏に礼拝し奉る。
- ⑦ sTobs chen nmams kyis rab brgyan te// ma lus mi mthun phyogs hjoms pa//  
ston pa srid med bu yi stobs// yon tan tshe dpag med phyag ḥtshal//  
(一切威力妙莊嚴、所有逆縁能摧壞；  
如同導師無子力、頂禮功德無量壽。)  
大いなるすべての力でよく飾り、あらゆる逆縁を打ち破ることができる。導師がいない私に力となる、功德無量壽仏に礼拝し奉る。
- ⑧ Me loñ mñam ñid la sogs paḥi// ye śes mañ poḥi mdsod ḥdsin pa//  
rtog pa ma lus khyod kyis spañs// ye śes tshe dpag med phyag ḥtshal//  
(猶如鏡子平等性、種種智慧持有者；  
一切疑惑摧壞尊、頂禮智慧無量壽。)  
鏡のような平等性などの、多くの智慧ある者である。  
すべての迷いを打ち破った尊者、智慧無量壽仏に礼拝し奉る。
- ⑨ rNam rtog rluñ gis khyod mi gyo// mthaḥ bral tiñ ḥdsin shi pa ste//  
bdud dañ mu stigs hjoms mdsad pa// mi gyo tshe dpag med phyag ḥtshal//  
(分別狂風尊不動、離邊入定寂靜者；  
魔興外道摧壞尊、頂禮不動無量壽。)  
あらゆる迷いの風にも不動であり、二辺を離れた禅定寂靜にある。  
魔と外教を打ち破られた尊者、不動無量壽仏に礼拝し奉る。
- h̄Khor paḥi sems can ma lus pa// khyod kyī mtshan tsam ḥdsin pa la//  
tshe dañ ye śes sbyin mdsad paḥi// tshe dpag med la phyag ḥtshal lo//  
(輪廻一切有情衆、盡聞尊者之名号；  
賜興長壽和智慧、無量壽前恭頂禮。)  
輪廻にあるすべての有情は、尊者の名を聞くだけで、  
長寿と智慧とが与えられる、無量壽仏に礼拝し奉る [32 頁下]。

このように、無量壽仏の讃頌の偈文を読誦し、Om vajrasado samaya... で始まる「百字明」の真言を読誦する。

続いて護法神に食べ物をお供養する儀式が執り行われ [33 頁下]、四天王に食べ物をお供養する儀式が執り行なわれる [34 頁]。龍に食べ物をお供養する儀式は、龍と龍の眷属とを



請来し、龍に対する特別な真言を三度唱える [35 頁]。

行者はマンダラを供養し、礼拝して、一切の有情にもろもろの成就の恩恵を賜るように祈る。大菩薩の姿で安住している大いなる本尊（無量壽仏）を礼拝し奉る。誓願本性を私に与えて下さい。菩提心も私に与えて下さい。仏・法・僧である三宝を私に与えて下さい。大解脱者の集まっているマンダラに、私を安住させて下さい。と三度この偈文を読誦する。

続いて前に述べた阿弥陀仏の真言を読誦する [39 頁]。そのあと次の三帰依文と發菩提心文を読誦する。

dKon mchog gsum la bdag skyabs mchu// sdig pa thams cad so sor b śags//  
 hgro ba (i dge la rjes yi rañ// sañs rgyas byañ chub yid kyis bzuñ//  
 sañs rgyas chos dañ tshogs mchog la// byañ chub bar du bdag skyabs mchi//  
 rañ gshan don ni rab bsgrub phyir// byañ chub sems ni bskyed par bgyi//  
 byañ chub mchog gi sems ni bskyed bgyis nas// sems can thams cad bdag gis  
 mgron du gñer//  
 byañ chub spyod mchog yid hoñ spyod par bgyi//hgro la phan phyir sañs rgyas  
 hgrub par śog [39 頁下] //

(我今歸依勝三宝、一切罪業皆懺悔、  
 隨喜衆生諸善事、至心受持佛菩提、  
 正覺妙法聖僧伽、乃至菩提我歸依、  
 成就自利他利故、發起求証菩提心、  
 既發最勝菩提心、接引有情如大賓。  
 樂行最勝菩提行、為利衆生願成佛。)

私は今三宝に帰依し、一切の罪業をすべて懺悔する。

衆生の善事に隨喜し、仏菩提を心底から受持する。

正覺の仏と妙なる法と聖なる僧に、私が菩提を得るまで帰依する。

自利と他利を成就するために、悟りを求めて菩提心を起こし、

最勝の菩提心を起してから、私はすべての有情を親友同様に受け入れる。

最勝の菩提行を求め行い、衆生の利益のために成仏する。(三度を唱える)

##### (5) 灌頂 (dbañ bskul pa = abhiṣeka)

対生に続いて、次のように僧によって灌頂が始まる。

行者あなたは何のために喜ぶのか。私は大いなる樂にいる幸運を喜ぶ。その子(衆生)のために何をするのか。仏の勝誓願に礼拝する。一切の有情を利益するために仏と成ろうという願いの心にこそ世俗諦がある。その私の心底にある心月のマンダラが、円満の形になる。私の心は一切法を包摂し無自性の空性にある。菩提の心月の上に、五角の白い金剛杵

(rdo rje dkar po rtse lña pa) の形になっているから勝義諦であるとされる [40 頁]。

今、行者あなたは一切の如来に加持され、あなたは一切如来のすぐれた秘密のマンダラに安住している。マンダラに安住していない人にはいうことができない。無信仰者にもいうことができない。このように考えながら真言を唱え、マンダラに安住する。

こうして、行者は一切の如来よ、私を加持して下さい。不死の長寿を成就させて下さいと三度繰り返して祈禱する。

灌頂を受けた行者は本尊の無量壽仏になり、上師と本尊は、不二の心底の 'hrih' の字から光を放って、仏や菩薩や聖なる声聞弟子や独覚者や持明者たちから加持され、世間と出世間のあらゆる栄耀や威畏や功德を与えられ、本尊無量壽仏や他の仏たちが、虚空に充滿して現われる。こうして全身に大雨のように灌頂を受け、不死の長寿を成就する。

こうして梵語で 'Om vajra ābeṣa a a a' (という灌頂の真言を多く唱え、楽器を用いる必要もあるとされている [42 頁]。

続いて宝瓶を持ちながら、以下の偈文を読誦する。

Lus la rnam snañ tshe dbañ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//  
bskal pa stoñ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig [44 頁] /

(身已毘盧佛灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時增加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に毘盧遮那仏が灌頂している。死王を脱し、千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪が清淨となるようを祈念する。

続いて毘盧遮那仏の真言を唱える。

sByin paḥi stobs kyis sañs rgyas yañ dag ḥphags// mi yi señge sbyin paḥi stogs rtogs nas// sñiñ  
rje can gyi groñ khyer ḥjug pa na// sbyin paḥi stobs kyi sgra ni grags par gyur// sbyin pa mthar  
phyin tshe yañ ḥphel par śog/

(布施之力佛真聖、人獅布施力通達；

趣入慈悲之都城、布施之力名称揚；

布施彼岸増長壽。)

布施の力をもつ仏は真實聖であり、人獅子は布施の力に通達している。

慈悲のマンダラに入って、布施の力の名声で知られている。

布施の彼岸の長寿も増えることを祈念する。

このように六波羅蜜である戒律 (tshul khirms)・忍耐 (bzod pa)・精進 (brtson ḥgrus)・禪定 (bsam gtan)・智慧 (śes rab) も同じく唱え、続いて三呪 (sñags gsum)<sup>69</sup> をそれぞれ唱える。

① Lus la rnam snañ tshe dbañ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//

bskal pa stoñ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig/

(身已毘盧佛灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時増加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に毘盧遮那仏は灌頂している。死王から脱し、  
千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪が清淨となるようを祈念する。

続いて、毘盧遮那仏の真言を唱える。

以上のように灌頂されたので、行者の全身は不死の甘露で満ち溢れる。壽命は無碍になったから、これまでに積み重ねてきた悪障と、無明から生起する煩惱、故に殺生を犯し、故に殺生の無碍になった寿命が短くなる悪障が浄められ、毘盧遮那仏の慈悲より加持して下さいと祈念する [45 頁]。

② Lus la rdo rje tshe dbaṅ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//

bskal pa stoṅ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig [46 頁] /

(身已金剛壽灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時増加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に金剛壽仏が灌頂している。あなたは死王を脱し、千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪が清淨となるようを祈念する。

以上にならって、煩惱暝・煩惱高慢・煩惱吝嗇・煩惱貪・煩惱嫉妬を唱える。

③ Lus la rin chen tshe dbaṅ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//

bskal pa stoṅ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig/

(身已大宝壽灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時増加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に大宝無量壽仏が灌頂している。死主を脱し、  
千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪が清淨となるようを祈念する。

④ Lus la padma tshe dbaṅ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//

bskal pa stoṅ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig/

(身已蓮華壽灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時増加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に蓮華無量壽仏が灌頂している。死王を脱し、  
千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪は清淨となるようを祈念する。

⑤ Lus la las kyi tshe dbaṅ bskur// bu khyod ḥchi bdag las grol te//

bskal pa stoṅ du tshe ḥphel nas// srog gcod sdig pa dag gyur cig/

(身已事業壽灌頂、愛子解脱死主故；

壽命千劫時増加、殺生罪惡成清淨。)

行者よ、あなたの身体に事業無量壽仏が灌頂している。死王を脱し、  
千劫にわたる寿命を得た。殺生の罪は清淨となるようを祈念する。

続いて行者と宝冠の五仏とを不二にするための儀式が以下のように執り行われる。

真言を唱え、続いて灌頂を受ける行者が宝冠を持ち、僧侶が以下の偈文を読誦する。

雲何如来降生時、一切天衆献沐浴、

今以清淨妙天水、我亦如是作灌沐。

如来が降誕された時、一切の天の衆生は沐浴を献ず；

我も今清らかな天の水をもって、如来に沐浴を献じることかくのごとし。

このように灌頂されると、灌頂を受ける行者の全身は甘露で満ち溢れ、大いなる喜びを味わう。すべての汚れを淨めた残りの甘露は、灌頂を受ける行者の頭頂に注がれるから、無量光仏を中心とする五仏の宝冠が灌頂を受ける行者の頭頂に飾られる。

こうしてあらゆる罪悪や障碍を消滅することができ、従って 408 種の病気、1,080 種の魔鬼、160 種の損害と、一切の不吉祥である障碍を消除するように祈禱することになる [48 頁]。

rGyal pa sras bcas bden paḥi byin rlabs dañ// mgon po tshe dpag med paḥi thugs rje yis//ḥgro  
ba ḥdu la bdag gis bsruñs zin gyi//ḥdi la sus kyañ gnod pa ma byed cig [48 頁] /

佛菩薩眞實加持、本尊長壽佛慈悲；

由我護佑衆生故、誰能侵害彼衆生。

仏・菩薩たちが眞の加持をしたことと、本尊無量壽仏の慈悲により；

一切衆生を行者私が守っているから、一切衆生を害うことがない。

こうして、行者は、自分が灌頂を受けたことによって、一切の衆生とともに成仏しようとする考えが生まれるものと思われる。

行者はすでに灌頂を受けたことによって、九尊の無量壽仏が、九方から現われ来て、長壽の甘露を行者の頭頂から入れると、心底の無量壽仏が宝冠の五仏に溶け込み、行者も不死長壽の甘露に満ち溢れる。百劫にわたっても得られない不死長壽の成就を得た人は、まさに幸運者であると思わなければならない [49 頁]。

## (6) 吉祥誦 (bkra śis rtags cad)

そこで続いて、次のように吉祥誦が始まる。

七宝 (rin chen sna bdun) である金輪・神珠・玉女・主蔵臣・白象・紺馬・將軍と、八吉祥物 (bkra śis rtags brgyad) である吉祥結・妙蓮・宝傘・右旋の法螺貝・金輪・勝利幢・宝瓶・金魚で供養する。この七宝と八吉祥物を供養したことによって、母なる一切の有情の寿命や福德や善業が増長する力が具わるように祈禱する [50 頁]。

昔、密呪と明呪の主妙吉祥金剛手が、世尊釈尊から聖なる「草」yuñs dkar を手ずから授かったように、今は、私たち僧も行者も、吉祥物である草 yuñs dkar によって吉祥となるように祈念する [50 頁下]。

本尊無量壽仏と九尊中の智慧長壽仏とは優れた許可を贈った。マンドラを供養し称讃し、

修行し、読誦したことによって成就された善業によって、行者と一切の衆生は、極楽浄土に往生することを願い奉る [54 頁下]。

dGe mtshan ji s-ed mchis paḥi bkra śis des// khyed cag gañ dañ gañ du gnas pa der// mi śis mtshan ma ḡgaḥ yañ mi ḥbyuñ shiñ// shiñ gi ḥbyor pa phul du byuñ pa yis// bde legs rgyun mi chad paḥi bkra śis śog [57 頁] /

(所有善事尽吉祥、無論您們住何處；  
不吉之兆豈出現、大地豐富殊勝故、  
善樂不斷願吉祥。)

すべての善きことは吉祥である。あなた方行者は何処にいても、  
吉祥でないことが生じることはあり得ない。

すべての大地は豊かで素晴らしいから、善であり樂であって、永遠に吉祥であることを  
願い奉る。

こうして、ナムレイ老人を中心とする無量壽佛灌頂の儀式が終り、五人の僧侶に布施を  
差し上げ、参加者たちをも含む食事に招待する。食事は肉と野菜などを一緒に煮込んだも  
のと、ご飯や饅頭などである。

## おわりに

以上は、阜新蒙古族自治县佛寺鎮ホイトウホロ村のナムレイ老人の自宅で執り行なわれ  
た、無量壽佛灌頂の儀式を事例調査して論述したものである。このような無量壽佛灌頂の  
儀式は、ほとんどのモンゴル地域で執り行なわれている。しかし、何処で、何時、誰によっ  
てこの無量壽佛灌頂の儀式が始まったかについては明らかではない。

推定できるのが、この無量壽佛灌頂の聖典の末尾に、チベット仏教ゲルク派の活仏パン  
チェン・ラマ四世ロサン チョジ ゲルツェンが作成したと記載されていることである。本  
論の 57 頁に述べたように、1645 年の時点で、モンゴルのグシ・ハーンと活仏パンチェン・  
ラマ四世ロサン チョジ ゲルツェンが特別な関係をもっていた。従って、1645 年以後、す  
べてにこの無量壽佛灌頂の儀式がモンゴルの地に伝えられたと推測できる。

またモンゴル人の意識には、自分が無量壽佛灌頂の儀式を受け、自分だけが幸せな生活  
や「長生不老」を送ることができても、満足することはできないという信仰意識がある。  
この無量壽佛灌頂の儀式を受ける民衆にとって、最も大切なことは、すべての人々ととも  
に幸せで「長生不老」の生活を送りたいという、仏教の「慈・悲・喜・捨」の菩提心の観  
念が見られるところである。一般の民衆は、折角得た人身を活かして永遠に家族や親類と  
一緒に生活を送りたいという民衆仏教 (Popular Buddhism、庶民仏教)<sup>66</sup> の思想が、モンゴ

ル仏教徒の日常生活に生きている。一般の民衆にとっては、教義仏教 (Doctrinal Buddhism) より民衆仏教の方が馴染み易いものである。言い換えれば、民衆仏教は、つまり信仰仏教ということであるからである。一般の民衆にとって仏教の教義がどのようであっても、その教義に関心をもっているとは限らない。民衆が、関心をもっているのは、信仰の面である。民衆は、仏教の教義などを深く理解しようとは考えていない。民衆は、仏教を信じるだけで満足している人が多い。

このような人間の寿命を延ばすための儀式は、モンゴル地域だけではなく、中国仏教でも、仏教寺院や仏教居士林などで「延生普仏」という法会を執り行なっている。この「延生普仏」によって父母の延命長壽ができるという信仰が残っている<sup>7)</sup>。モンゴル仏教も中国仏教もいずれも阿弥陀仏信仰と関連している。

北京雍和宮 (モンゴル語 *Nairaltu nairamdaku süm-e*、モンゴル仏教寺院、日本仏教の本山に相当) でも、2000 年から毎月 8 日に、無量壽佛灌頂の法会を再開し、厳修している<sup>8)</sup>。詳細の研究は後日に譲りたい。

《注》

- (1) 陶克通嘎等編『瑞應寺』(Togtonga, *Gaiqamsig joqiragulugci süm-e*) 中国内蒙古文化出版社、1984 年 10 ~ 13 頁。また項福生主編『阜新蒙古族自治县民族志』(中国遼寧民族出版社、1991 年) 94 頁によれば、清朝の道光四年 (1824 年) 清朝の理藩院から満州語・モンゴル語・チベット語で彫った「tümed un jasag da lhama Cagan diyanci Qutuqtu in tamaqu 東土默特札薩克達喇嘛察第顔齊呼図克図之印」を贈ったと記載されている。
- (2) モンゴル仏教は、無量壽仏 (時には長壽仏) と無量光仏と大日如来とに分ける。拙論「モンゴルにおける阿弥陀仏の信仰」(『印度学仏教学研究』日本印度学仏教学会、第 51 巻第 1 号、2002 年) 279 ~ 282 頁参照
- (3) 瑞應寺の僧侶個人の所蔵であったが、筆者が贈与された聖典に依る。
- (4) 詳細は、拙論「チベットとモンゴル仏教における活仏の由来」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第 21 号、2001 年) 19 ~ 49 頁参照、また丹迥冉納班雜 李徳成『名利双黄寺 清代達頼和班禅在京駐錫地』(中国宗教文化出版社、1997 年) 42 ~ 43 頁参照

因みに 1645 年、モンゴルのグシ・ハーン (Gu si Han 固始汗 1582-1654、本名は Tho rol pavi hu 図魯拜琥) が、チベット全土を征服した。グシ・ハーンは、当時のチベット仏教のゲルク派の代表者であり、グシ・ハーンに協力を惜しまなかったロサンチョジゲルツェン・ラマ (bLo bzañ chos kyi rgyal mtshan 羅桑却吉堅讚 1567-1662) に、「班禅博克多」(Pan chen bogda) の聖号を贈った。「班禅」は、サンスクリット語パండిタ (paṇḍita) に由来し、大学者を意味する。「博克多」は、モンゴル語で、勇気と智慧がある英雄を尊称する言葉である。だから、サンスクリット語とモンゴル語とを合わせると、中国語で「智勇双全の大学者」を意味する。これが、パンチェン・ラマの活仏制度の「名称」の発端である。チベット仏教のゲルク派の教団から、ロサンチョジゲルツェンはパンチェン・ラマ四世に認定された。そしてケドゥブ・ケレク・パルサン (mKhas grub dge legs dpal bzañ 克主格雷貝桑 1385-1438) はパンチェン・ラマ一世に追認され、エンサ・ソナムチョクラン (dBen sa bsod nams phyogs glañ 恩薩索朗却朗 1439-1504) がパンチェン・ラマ二世に追認され、エンサ・ロサンドンドゥブ (dBen sa blo bzañ don grub 恩薩羅桑頓珠 1505-1566) がパンチェン・ラマ三世に追認された。北チベットすなわち後蔵のタシルンボ寺 (bkra śis lhun bo mgon pa 扎什倫布寺) は、歴代のパンチェン・ラマが居住する寺院である。康熙五十二年 (1713 年) 康熙皇帝は、パンチェン・ラマ五世 (1663-1737) に「班禅額爾德尼」の聖号と「敕封班禅額爾德尼之印」の金冊、金印を贈った。「額爾德尼」は満洲語であり、「寶貝」

(erdeni) を意味する。これが、清朝政府から正式にパンチェン・ラマを冊封した始まりであった。モンゴル人は、パンチェン・ラマをパンチェン・ボクダ (Pan chen Bogda 班禪博克多) と呼んでいる。チベット人は、パンチェン・リンポチ (Pan chen rin po che 班禪仁布切) と呼び、中国人は、パンチェン・ダーシ (Ban chan da shi 班禪大師) と呼んでいる。

- (5) 行者の心を守ってくれる働きがある明呪・総持呪・密呪をいう。
- (6) 前田恵學編著『現代スリランカの上座仏教』(山喜房仏書林刊、1986年) 1～9頁参照
- (7) 死後の問題については、中国では人が亡くなった後、いろいろな形で葬式を行なっている。中国人の宗教意識によって、死者を憶念するために、法会などを行なっている。北京仏教居士林でも、死者の位牌を置く位牌堂がある。居士林で「往生普仏」という法会を死者のために行なっている。生きている人のために「延生普仏」の法会を行なう場合もある。これは、自分の祖母や父母の長命を祈念する法会である。寺院では49日の間に「打普仏」という法会を行なうのが普通である。居士林は、寺院と違って個人的に葬式を行なわない。毎月1日と15日の「蓮池念仏会」で隨堂普仏という法会を共同で行なう。詳細は、本紀要記載の夏法聖「現代中国の居士仏教」を参考して下さい。
- (8) 雍和宮で用いている『灌頂文』の作成者は、パンチェン・ラマ四世ロサン チョジ ゲルツェンである。雍和宮の『灌頂文』は木版であり、瑞應寺の『灌頂文』は写本であるから、恐らく同じものと考えられる。なお、北京雍和宮の詳細は、拙論「文化大革命後のモンゴル仏教の様態—北京市雍和宮と承德市普寧寺を中心として—」(パーリ学仏教文化学) 第16号、平成14年、82～95頁を参照されたい。

文化大革命以前の北京には、モンゴル仏教寺院は、38カ寺あった。文化大革命の最中に、38カ寺の中の37カ寺が破壊され、唯一残ったのは、北京雍和宮だけである。文化大革命の最中に、中学生や高校生を中心とした紅衛兵が、雍和宮を壊しに入ってきた。この情報を、当時の住持である高全寿師が、直接周恩来総理に電話で報告した。周恩来総理は、速やかに部下の韓念龍秘書を雍和宮に派遣し、紅衛兵を説得した。周恩来総理のお蔭で雍和宮は幸存することができた。雍和宮だけが残ったのは、こういう理由からである。雍和宮は、北京市最大のモンゴル仏教寺院である。いわば、モンゴル仏教の総本山ともいえるべき大寺院である。清朝の乾隆皇帝の勅願寺であり、乾隆九年(1744年)に亡父・雍正帝の追善のために、宮殿を改修してできた寺院である。地上18メートル・地下8メートルの弥勒仏は、ダライ・ラマ七世カルザンギャムツォ (bsKal bzañ rgya btsho 格桑嘉措 1708-1757) の命により、インドから運ばれた、1本の白檀の巨木を彫り上げた仏像である。文化大革命の間は、雍和宮では、法会と修行生活の一切が禁止された。勿論、中国全土で、一切の宗教信仰が禁止された。文化大革命が終わって、1978年12月の第11期第3回中央委員会全体会議で、新しい中国の宗教政策が発表された。3年後の1981年には、雍和宮で法要を始めとして仏教活動が再開された。

平成15年度、文部省科学研究助成費による研究成果の一部である。

所属・職：中国社会科学院世界宗教研究所、日本学術振興会外国人特別研究員

(同朋大学仏教文化研究所)



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

- 写真 1 瑞應寺の建立に際して康熙皇帝が贈ったチベット語・モンゴル語・中国語・満州語で書いた「瑞應寺」という寺名の勅額
- 写真 2 文化大革命（1966～1976）で食糧機関の倉庫として残された瑞應寺の大雄宝殿
- 写真 3 無量長壽佛灌頂の儀式を行なう導師
- 写真 4 無量長壽佛灌頂の儀式で用いる什器
- 写真 5 無量長壽佛灌頂の儀式を依頼する信者ナムレイ老人
- 写真 6 写真 7 マンダラ供養の儀式





写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12

写真8 僧侶から灌頂を受けるナムレイ老人  
写真9・10 僧侶から灌頂を受けるナムレイ老人夫婦  
写真11・12 法輪殿で法会を厳修している北京雍和宮の僧侶